

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 軍政下アルゼンチン民衆文化への検閲：<br>メルセデス・ソーサ「自分の土地のためのセレナーデ」(1979)を一例として                                                                                                                                                       |
| Sub Title        | Censorship on popular culture : a case of "Serenade for one's land" (1979) of Argentine singer Mercedes Sosa                                                                                                      |
| Author           | 伊香, 祝子(Ika, Shukuko)                                                                                                                                                                                              |
| Publisher        | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会                                                                                                                                                                                                   |
| Publication year | 2017                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.49 (2017. ) ,p.17- 39                                                                                                                       |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper                                                                                                                                                                                       |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20171231-0017">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20171231-0017</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 軍政下アルゼンチン民衆文化への検閲 ——メルセデス・ソーサ「自分の土地のための セレナーデ」(1979)を一例として

伊香 祝子

## 序

1976年から1983年のアルゼンチンでは、軍事政権のもと、反体制派への弾圧や、書籍や映画、テレビ、ロック音楽<sup>1)</sup>などへの検閲が行われていた。検閲とは、「調べあらためること。特に、出版物・映画などの内容を公権力が審査し、不相当と認めるときはその発表などを禁止する行為」であるが、本稿では、アルゼンチン共和国のポピュラー歌手メルセデス・ソーサが、ヨーロッパへ亡命した1979年に作成したアルバム『自分の土地のためのセレナーデ *Serenata para la tierra de uno*』の内容と亡命にいたるまでの経過を叙述し、当時の軍事政権が、民衆文化（ポピュラー音楽）の担い手に対して、どんな「検閲」を行ったのか、またその目的がどのようなものだったのかを明らかにしていきたい。

ソーサは、1935年にアルゼンチン共和国北部のトゥクマン州サン・ミゲル・デ・トゥクマン市〔以下トゥクマン市と呼ぶ〕で生まれた。本名はアイデ・メルセデス・ソーサ。世界48か国、バチカン公国、米カーネギーホールなど主要ホールで公演を行い、ラテンアメリカを代表する女性歌手として知られる。アルゼンチンの若手アーティストと積極的に共演し紹介するほか、ブラジル、キューバ、スペインその他の主要なアーティストと共演。1995年、国連女性開発基金賞を受賞。ドイツ、ブラジルなど各国政府から受勲。2002年、ローマで行われた平和のためのコンサートに出演。2003年にはラテン・グラミー賞を受賞。アルゼンチン国内では「ラ・ネグラ」の愛称で親しまれている。2009年に亡くなった時は国葬が営まれた。

1949年に14歳で活動を開始。ペーニャ〔クラブ〕やラジオ、サーカス、遊園地、各種

の集会で歌っていた。1957年に夫で作曲家・歌手のオスカル・マトゥスとともに、同国西部のメンドーサに転居し、文化人サークルに迎え入れられる。一児（ファビアン・マトゥス）を出産し、プエノスアイレス、ウルグアイで歌手としてキャリアを積んだのち、マトゥスや詩人・作詞家のアルマンド・テハーダ・ゴメスらと1963年ヌエボ・カンシオネーロ宣言<sup>2)</sup>に名前を連ね、これに賛同する作詞・作曲家らの作品を歌う。1965年のコスキン・folklore・フェスティバル<sup>3)</sup>に出演し、全国的に有名になる。これ以後、多くのLPを録音し映画にも出演した。1970年代半ばごろから、検閲のため演奏活動が困難になり、1979年2月に活動拠点をヨーロッパへ移し、1982年まで国内での公演を行わなかった。

ソーサは、自ら詩を書き作曲することはなかったが、歌う作品を選び、歌詞を読みこむ（Matus 2016: 47）ことで、第三の作者になった。また、ソーサは、幼いころの貧しい生活の経験（Ⅰ章）から、 Kommunismus に賛同し、その姿勢は共産党を脱退しても変わることなく、企業と提携した仕事もしなかった（Matus 2016: 80）。また、独立作戦（Ⅱ章3節）で指揮をとった元軍人で政治家のブシがトゥクマン州知事を務めた5年間は同州で公演をしないという決断をつらぬいた<sup>4)</sup>（Braceli 2010: 306）。

ソーサの作品（シングル、EP、LP）は、初期にオスカル・マトゥスのレーベル Ediciones El Grillo から出されたものをのぞいては、多国籍の大手レコード会社（RCA Victor, Polygram/Universal）から発売されており、音楽産業に組み込まれた存在ではあるが、曲目の選択や公演の内容などについては、彼女自身の主体的な意思<sup>5)</sup>が反映されており、自律性を保つていた<sup>6)</sup>。

本稿では、このような歌い手が生まれ育った背景をⅠ章で概観し、Ⅱ章では軍政（国家再組織プロセスと呼ばれた）の特徴や、軍事政権の成立の要因となったとされるゲリラ活動、国家再組織プロセスの原型となったトゥクマン州で行われた独立作戦を概観し、いっぽうで検閲の対象とされることになった個人としてのソーサの思想を、自伝を中心に検証する。Ⅲ章では、亡命にいたるクロノロジー、アルバム「自分の土地のためのセレナーデ」の内容を紹介し、結論部分で、このような検閲を行った軍部の目的がどのようなものであったか考察する。

1) 書籍への検閲については、Invernizzi y Gosiol 2002 など。アルゼンチン・ロックについては日本語では比嘉の論文（2010）がある。

2) ニエボ・カンシオネーロ宣言の全文はMatus 2016: 186-195 で読むことができる。以下は抜粋。「この国で生まれた民衆的な内容をもつ音楽の探求は、アルゼンチン人にとってこれまでもっとも大事

な目標のひとつでありましたし、現在もそうです。残念なことに都市の民衆の歌や土着の民俗的なルーツをもつ民衆の歌のなかにも、人工的で胸苦しくなるようなものが紛れ込んでいます」。「民衆にねざしたこの国の音楽の探求、それは国の人間と地域をあますところなく表すものであり、ただ一つのジャンル——ばかげたことです——を通じてなされるのではなく、多様な表現の集約によるものでなければなりません」。「文学的にはブエナVENTURA・ルナが、文学＝音楽的にはアタワルパ・ユパンキが、土着のルーツを傷つけずにその内容を深めるという改革を始めたのです。この発見の上に、民衆への感受性という鉱脈をほりさげようとはせ参じた新しい世代の音楽家や詩人、歌い手たちが協力をつみかさね、現在のフォルクローレの再生の主役となりました。ヌエボ・カンシオネーロはアルゼンチンの作曲家、詩人や歌手の豊かな創造性を求め、国内のさまざまな地方の表現の多様性のなかで、民衆音楽を統合することを目的としています。したがって慣例主義や、伝統主義者たちのタブーからの国の音楽遺産——民俗音楽起源であれ、大衆的な典型であれ——を純化することを提案するものです」。

- 3) コスキン・フォルクローレ・フェスティバル 中北部に位置するコルドバ州コルドバ市郊外のコスキン市で1961年から行われている。毎年1月後半に9日間近く毎晩行われるコンサートが中心のイベント。市民が中心となって企画されて始まった。最初はラジオで、のちにテレビで全国中継も行われている。フォルクローレは、英語のfolkloreをスペイン語読みしたもので、もっぱら作者不明で伝承されてきた音楽のほか、20世紀初頭から制度的な研究の対象となった民俗音楽の形式に則って作られた音楽と舞踊を指す。フォルクローレ・フェスティバルのなかでは、音楽や舞踊以外の民芸品の展示や販売、講演会なども開催される。
- 4) 独立作戦 (Operativo Independencia) 陸軍によってトクマン州内で行われたゲリラの掃討作戦 (Ⅱ章参照)。ソーサがコンサートを拒否したのは、1976年からこの作戦の指揮をとったブシ (Antonio Domingo Bussi 1926-2011) が州知事をつとめた (1995-99年)。 [https://es.wikipedia.org/wiki/Antonio\\_Domingo\\_Bussi](https://es.wikipedia.org/wiki/Antonio_Domingo_Bussi) (2017年9月29日参照)
- 5) あなたは現在いるレコード会社に満足していますか? という問いにたいして、「いつでも快適でした。それに私はいちども、どの曲を歌えとか言われたり、暗示されたこともありません」(クロニカ誌でのインタビュー『中南米音楽』1975年8月号, 37ページ)。
- 6) 「私は主観をまじえず、ということは損得を考えずにレパートリーを選びます。すべての詩人、作曲家に対して私は扉を開いています」(同, 36ページ)。

## I. 20世紀アルゼンチン社会の変化とソーサ

アルゼンチンは世界恐慌まで、少数の地主、輸出入業者、大金融業者を中核とする比較的安定した寡頭制支配体制のもとで、農牧生産品の輸出国ならびにヨーロッパの工業製品の市場として飛躍的な発展を遂げてきた (松下 1993: 45)。1900-10年には「アルゼンチンのペソは、イギリスのポンドを除くすべてのヨーロッパ通貨より高い相場で取引されて」おり (フレイザー & ナヴァーロ 1997: 20)、1920年代の首都「ブエノスアイレスは南米最大の都市であり、南北両大陸を通じて、ニューヨーク、シカゴに次いで三番目に

大きかった（同：26）。

ソーサが生まれたトゥクマン州は、地理的にはブエノスアイレスから 1200 km ほど離れているのだが、北西部のなかでは人口も多く、1916 年には大学も作られるなど比較的栄えていた。植民地時代に導入され、ごく小規模に行われていたサトウキビの栽培と砂糖生産は、鉄道の伸長や、近代的な製糖技術の導入によって、19 世紀後半から飛躍的に拡大する。その背景には、中央の有力者とインヘニオ〔製糖工場〕所有者層との結びつきの強さによる、輸出補助金法（1897 年）関税引き上げ（1931 年）などの手厚い保護政策<sup>1)</sup>があるのだが、これにより「トゥクマン州経済の糖業モノカルチャー化を進行・維持させ、現在に至るトゥクマン州の貧困問題等の社会・経済問題の根底に横たわる構造を形成させた」（宇佐見 1998：43）。

国全体では、1929 年の世界恐慌の影響で輸出量が激減し、一人当たりの国民所得が下降すると、「社会不安も増大し、学生組織や社会独立党などによる反政府運動も活発化」していき、このような反政府感情に乗じた軍部が 1930 年 9 月にクーデタを起こした（松下 1987：219）。1930 年から 1943 年は、のちに悪名高き 10 年と呼ばれるのだが、この時代の民衆の生活がどのようなものであったか、1935 年生まれのソーサの伝記<sup>2)</sup>をもとに見てみたい。

……父さんはどんな仕事でもやりました。港の沖仲士〔ブエノスアイレスまで出稼ぎに行っていた〕、製糖所の丸太かつぎ、夏のさなかに製糖所のまきをくべる仕事もしていました。気の毒な父さん。製材所で働いていた時は最悪でした。そこでは法律が守られていなくて、コップ一杯の牛乳も出なければマスクも支給されませんでした。……土曜日になるのをどんなに心待ちにしたことか、その日が給料日でしたから。うちに残っていたのは塩とわかすための水だけ。母さんは台所で魔法を使いました。1 キロの小麦粉と卵一個からパンやパスタを作って…… パンは最初の数日は美味しいけれど、そのあとは固くなるか、食べつくしてなくなってしまいました（Braceli 2010: 34-35）。(略) 母さんのほうはお金のある家族から請け負って、洗濯とアイロンがけをしました。あたたまるまで一時間はかかる炭火アイロンでたくさんの服にアイロンをかけていたものです。そして洗濯や掃除の仕事をしては家にいくらかのお金を入れていました。家には食べ物ほとんどなかったけれど、母さんは魔法のように何か食べるものを出してくれました。私たちはいつもいい家庭の子どもたちのような服を着ていました。母さんは古着をもらいうけては布を裏返して、私たちに新しい服を

縫ってくれたのです（同：35）。

外交からペロニズムの政策について分析した論文のなかで、松下は、1943年のクーデタは、30年のものとはちがって、「軍部とエスタンシエロ層の共存関係に終止符をうつもの」（松下 1987：244）で、そこには社会革命的な要素も胚胎されていた（同前）と説明している。この1943年のクーデタで生まれた軍事政府の労働福祉庁長官となったファン・ドミンゴ・ペロン大佐が、労働者に対する保護政策を採り、この政策に魅了された労働者が、彼の熱狂的支持者となって（同：6）ペロニズムが生まれたからである。

ペロニズムはラテンアメリカのポピュリズムの一種であり、軍事史家でもあったペロンは、「社会正義、経済的自立、政治的主権」をスローガンとし、「総力戦的発想から国民の団結を重視し」、その前提としての「社会的格差の是正」（同：196）、かつ「共産主義の温床となる社会的不正を除去するため」労使の対等化をめざし（同：199）つつ、工業化による国の経済的自立をめざした。ペロニズム自体は、そこから派生したペロン党が正義党へ名前を変え、1989年から2015年まで政権党をつとめたこともあり、全体的な評価は容易にはくだせないが、それまでは「政治的にマージナルな状態におかれていた労働者を政治体制のなかに組み入れ、彼らの生活水準を高めた功績は何人も否定できぬところ」（松下 1987：185）であった。

実際、それまで過酷な労働に従事していたソーサの父親も、ペロン時代に「姻戚のコネで」社会保険協会に勤務するようになり「デスクワークに変わった」、かつて製糖所で働いていた時に、弁当を持っていくことができなかったときに食べ物をわけてくれた人たちが年金暮らしができるよう便宜を図ることができるようになった（Braceli 2010: 35）。

両親は熱心なペロニスタであり、「1940-50年代に育ったほとんどすべてのトゥクマン子のように、ママもペロニスタ一家のなかで育った。活動家ではなかったけれど、ほとんど生まれながらのペロニスタだった」（Matus 2016: 169）と息子のファビアンは語る。このような環境からソーサは、18、9歳ごろはペロニスタの集会で歌うこともあったが、1957年には夫とともに移住したメンドーサで共産党員の友人たちと出会い、入党する。1959年にテハーダ・ゴメスやマトゥスの作品を“Canciones con fundamentos（土台のある歌）”（Ediciones El Grillo）を録音するが、すぐには評価に結び付かず、下積みの生活が続く。一躍スターとなったのは、コスキン・フォルクローレ・フェスティバルに飛び入り出演した、6年後の1965年のことだった<sup>3)</sup>。

1955年のクーデタ後は、脱ペロニスタ化がすすめられた。ペロニスタの多くは公職追

放の身となり、労働者の諸権利を盛り込んだ四九年憲法も廃棄された（松下 1987：205）。しかしこれによってむしろペロニズムの支持は拡大し、ペロニズムと軍部の対立はおさまらなかった。こうした状況を解決するため、1966年にイリア政府をクーデタで倒してオンガニア軍事政権が成立した。オンガニア政権は、「外資への門戸開放、国内産業に対する保護政策の撤廃など開放経済政策を進め、民間企業のためのインフラストラクチャーの整備をはかった」（松下 1993：169）が、1969年5月初めの大規模な反政府行動コルドバソが契機となり崩壊した。その後、1973年5月の大統領選挙で、スペインに亡命中のペロンの身代わりとして立候補したエクトル・ホセ・カンボラが当選し、ペロニスタが政権に復活した。同年6月にはペロンの帰国が許可され、9月に実施された大統領選挙でペロンが60%の支持をえて大統領に返り咲いた（同：170）。

軍部は「ペロニスタの過激化をおさえ……統率でき」なおかつ、「資本の支配の継続と両立できるポピュリスト的解決に労働者を向け」（同：170）ることのできる人物としてのペロンに期待した<sup>4)</sup>が、成果のあがらないまま、翌1974年7月1日にペロンは死亡。副大統領だった妻のイサベル・マルティネス・ペロンが後継者となったが、政治・経済の危機をおさめることはできず、ペロニズムの分裂と労働組合運動の混乱がつづくなか、1976年3月のクーデタが決行される。

この間、ソーサは“Yo no canto por cantar”（1966），“Hermano”（1967），“Para cantarle a mi gente”（1967），“Mujeres argentinas”（1969），“Navidad con Mercedes Sosa”（1970），“El grito de la tierra”（1971），“Homenaje a Violeta Parra”（1971），“Hasta la Victoria”（1972），“Cantata sudamericana”（1972），“Traigo un pueblo en mi voz”（1973）と多くのLPを録音した。1967年には初めての海外公演を行い、69年には米国、チリ、72年にはウルグアイ、メキシコ、ベネズエラ、73年にはスペインと、国外での仕事が増えてくる。

また、1969年の“Mujeres argentinas（アルゼンチンの女たち）”<sup>5)</sup>所収の「Alfonsina y el mar アルフォンシーナと海」（アリエル・ラミレス曲、フェリックス・ルナ詞）、1971年に発表の“Homenaje a Violeta Parra ビオレッタ・パラへ捧げる”<sup>6)</sup>所収の「Gracias a la vida 人生よ、ありがとう」など代表作が生み出された。その一方で、選ぶ歌の詩の内容（または作者）が問題となり<sup>7)</sup>、軍部に危険視もされるようになっていく。ソーサの側も軍人たちへの反発を隠さず、1972年のコロソ劇場でのコンサートの折に、臨席していた事実上の（de facto）大統領ラヌセ將軍にあいさつに出向かなかったというエピソードがある（Braceli 2010: 149）。

- 1) トックマンの地方オリガルキーと中央政府や諸団体とのかかわりは、宇佐見 1996, 1998 で詳しく検討されている。
- 2) 公式の伝記として唯一のものであり、40 年近い付き合いのジャーナリスト、ロドルフォ・ブラセリにソーサが全面協力し、2003 年に出版された。没後の 2010 年に序文、年表、写真等に補足して第 2 版が出版された。
- 3) ソーサは本来フェスティバルの主催団体からは招待されていなかったが、出演者として招待されていたホルヘ・カフルーネが主催団体の反対を押し切って舞台に招待し、一曲だけ歌って聴衆の喝さいをあげた。
- 4) この点について、ペロンの対応が左翼組織を過激化させたとの指摘もある。モンテネロス (Montoneros) は、もともとペロン派の武装組織として結成された。当時亡命中だったペロンは、「寡頭勢力、外国資本に対する武装闘争を容認するように」なり (57 年)、社会主義と民族主義の結合は可能 (68 年) と柔軟な姿勢を見せていたが、1975 年ペロニスタ政権が復活すると、「合法的支配の復活したことにより暴力の必要性は消滅したとして」、「ゲリラ活動に厳しい姿勢を示」(松下 1987: 208) すようになった。結果としてモンテネロスは「反体制的姿勢を強めて現行国家体制自体に挑戦する傾向を強め」、[もうひとつの主要な武装組織である] ERP の動向ともあわせて、武力闘争が熾烈をきわめるものとなった (小倉 2015: 352)。
- 5) アルゼンチンの女たち 歴史上の実在の女性 8 人を題材に作られた組曲。ラミレス＝ルナによる創作組曲としては、ほかに『ロス・カウディージョス』(1965)、『南アメリカのカンタータ』(1972) がある (高場 1979: 75)。
- 6) ビオレッタ・バラへ捧げる チリの詩人、歌手、民謡研究家、工芸 (刺繍等) 家ビオレッタ・バラ (1917～67) の作品集。
- 7) “Hasta la Victoria” (1972) 所収の同タイトルの「勝利のときまで」は、1965 年エルネスト・“チェ”・ゲバラがフィデル・カストロにあてて書いた手紙の結びの言葉の一部であり、直接名前はだしていないが、1967 年に亡くなったゲバラに捧げられた内容 (濱田 1974)。作詞作曲者アニバル・サンパジョ (Anibal Sampayo 1926-2007) は、ウルグアイの歌手、詩人、作家など。ウルグアイの都市ゲリラ、トゥパマロスに参加した罪で 1972 年から 1980 年まで投獄された (出典: es.wikipedia.org 2017 年 9 月 28 日参照)。また、このアルバムには、隣国チリで人民連合政権に協力していたビクトル・ハラの「耕す者への祈り」が含まれている。ハラ (1932-73) は、演出家、民謡研究家、シンガーソングライター。1973 年の軍事クーデタの際に殺害された。

## II. 国家再組織プロセス

### 1. 1976 年のクーデタと国家再組織プロセス

1976 年 3 月、イサベル・ペロン政権をクーデタにより転覆させた軍事評議会は、「危機的状况にあるアルゼンチン国家を立て直す」ために、「特定の集団の利益のみを考慮するのではなく、アルゼンチン国民全体と祖国アルゼンチンのために、アルゼンチン社会に存在する国家転覆活動の撲滅」を掲げ、「すべての社会経済セクターの参加を基盤とし、よ

り良い国民生活のための経済発展を進めること」を目指して、具体的な政治プログラムに着手した。

この国家再組織プロセスの特徴として、強固な反共産主義的イデオロギー色、キリスト教と西洋文明を基盤とするモラルや価値の強調があり、「そのような価値に反し、共産主義的要素を含んでいると思われる思想や活動、国家安全保障を脅かすと考えられる集団や個人、その同情者に対」する戦い、いわゆる「汚い戦争」が展開されること（杉山 2007：106）になった。この「汚い戦争」は、「単にゲリラを壊滅させることを目指したのではなく、アルゼンチン国家の安全保障上脅威と思われる思想や文化を排除するといった文化戦争の側面をもっていた」（同：23）。

このような文化戦争のなかでは、「西洋文明とキリスト教を基盤とする倫理や価値に反する考え方や行為はすべて「国家転覆的」とレッテル貼りされ、レッテルを貼られた個人や集団、そこにシンパシーを抱く者や集団は撲滅されるべき対象、断固として戦い負かされるべき敵とみなされた」（林 2009：90）。

そして、「敵」に対する手段としてとられたのが強制失踪であったが、「失踪者」の大量創出の方法論は、左翼テロリズムを鎮圧するという題目通りの目的を遂行するためのものであるよりも、社会全体を恐怖によって拘束し従属させることで、政治・経済体制を新自由主義的なそれに転換することが眼目」であり、「失踪」させられた人々の多くが武装したゲリラ兵ではなく、「拉致の対象になる基準は、ゲリラ活動はおろか、反政府的政治活動への参加の度合いや、参加の有無すら関係なかった」（石田 2015：60）。

## 2. ゲリラ思想と活動について

「共産主義的要素を含んでいると思われる思想や活動、国家安全保障を脅かすと考えられる集団」と前項にあるが、具体的にどのようなものだったのだろうか。

「1959年のキューバ革命はラテンアメリカ諸国に甚大な影響を及ぼし」、そこにアルゼンチン出身のエルネスト・ゲバラが参加していたことは、アルゼンチン国内のゲリラ運動を「エスカレートさせた」。1969年5-6月にコルドバ市で労働者と学生によって展開された反政府運動コルドバソ以降、都市ゲリラの組織化と強大化が進展し、70年代前半には多数のゲリラ組織が存在した。その中心となった組織が、モンテネロスとERPであったという（松下 2015：169-170）。

モンテネロスは、オンガニア軍事政権に反対する、ブエノスアイレス市とコルドバ市で別々に組織化されてきたペロニズム左派の若者たちのグループが、1970年5月に合体し

たことで成立したゲリラ組織である。彼らは解放の神学を提唱する聖職者たちの影響を受けながら、次第に「武装闘争に傾斜していった」（松下 2015：170）。松下の要約によれば、「国の歴史的現実としてのペロニズムを基盤に、フランクらの従属論に影響を受けながら、伝統的ペロニズムとは相違した武闘路線による従属的資本主義の打倒と社会主義の実現を目指した組織」（松下 2015：172-173）であり、「75年の活動最盛期には作戦部員が5,000から1万、支援者、理解者、同情者は10万近くに達したとも言われている」（同：171）。彼らはゲバラの失敗を教訓にして、根拠地を都市部に求め、都市部で実業家の誘拐などの行動を繰り返した（松下 2015：170）。

ERPはPRT-ERP（労働者革命党人民革命軍）の略で、これにつながる最初の組織は、1961年にサンティアゴ・デル・エステロ州で結成されたFRIP（インドアメリカ人民革命戦線）であった。「その後、ナウエル・モレノ率いるトロツキスト組織PO（労働者の言葉）との統一戦線としての労働者革命党の結成（1965年）を経て、少なくとも66年の終わりまで、サントウチョ〔PRT-ERPのリーダー〕は、「警察と雇用者による弾圧に対する自己防衛」の場合を例外として、「暴力」を不可避な闘争手段としてはみなしていなかった」（廣瀬 2005：198）が、1967年1月にトゥクマン州で行われたFOTIA（トゥクマン製糖産業労働者同盟）の呼びかけによるデモに参加した際、死者一名、重傷者三名を出した歩兵憲兵隊と警官隊とによる住民への無差別武力行使を目撃したことが契機となり、武装闘争を決意することとなる（廣瀬 2005：198-199）。

しかし、この決断がきっかけでPRTは1968年「戦士」派と「真実」派に分裂し、「戦士」派は第四回大会において、権力掌握の中心的戦略として武装闘争を採用し、目指すべき革命の性格規定を行った。1970年7月中旬にPRT中央委員会は再び三分裂したが、サントウチョらの多数派は同年7月30日に第五回大会を開催し、「社会主義・労働者の革命戦争を開始するため」にERPを結成した（小倉 2015：339）。1973年5月のカンボラ政権成立後、政治犯の恩赦に伴い、ERPのリーダーシップが強化されると同時にメンバーが急増することになった。ERPは武器の使用をはじめとする軍事訓練を重視し、多国籍企業の重役誘拐などで巨額の資金を手にしていった（杉山 2007：96）。また武器窃盗のために陸軍の兵器庫を襲撃するなどしたため、ペロン政権はゲリラ活動に関連する取り締まりを強化することになった。1974年9月、サントウチョは、ERPを本格的に軍隊としての組織形態を有した革命軍にし、その運営に乗り出した（杉山 2007：97）。また、この年トゥクマンの小さな町を占領し、そこを解放地区と指定したりした（同：98）。

### 3. 汚い戦争のプロトタイプとしての独立作戦 Operativo Independencia

イサベル・マルティネス・ペロン政権の転覆は、1976年3月24日に実行されたが、それ以前から同政権により、左派ゲリラに対する取り締まりが行われていた。そのひとつが、1975年2月から12月にかけてトゥクマン州で実行された「独立作戦 Operativo Independencia」である。大統領令により、陸軍は、トゥクマン州におけるERPの国家転覆活動に関わる行動を中立化あるいは壊滅するための権限を得、「独立作戦」が開始されることになった（杉山 2007：98）。

陸軍はこの作戦でERPに対して勝利するが、このことは以下の三点において陸軍にとって重要な意味をもった。一つ目は、「大統領令という公式な手続きを経て、軍部が組織的に国家転覆活動に関与するあらゆる行動に対し、軍事的行為で対処することが認められ」たこと。二つ目はERPのトゥクマンでのゲリラ戦が、軍部に対して国家安全保障の切迫した危機を過剰に認識させる程の心理的インパクトを与えたこと。三つ目にはこの作戦において、秘密収容所が設置され、情報入手の名目で拷問がおこなわれ、拷問後処刑されるといういわゆる「汚い戦争」が組織的に開始されたことだ（同：99）。

独立作戦のなかでは、ゲリラ戦闘員だけでなく、非戦闘員も犠牲になった。ERPを直接襲撃するのではなく、彼らの活動の支援基盤となっていると考えられる町村の住民を攻撃したり、あるいは、逆に住民の協力を得ることでERPの基盤を弱体化しようとした。そのため、1500人を超える非ゲリラ戦闘員が秘密収容所に収容され、拷問を受けることになったと言われている。そして、1975年10月、トゥクマン州だけでなく、アルゼンチン全土において軍部が国家転覆活動に対し必要な軍事的行動をとる権限を与えた大統領令が発布されることになる（同：99）。

### 4. ソーサの思想

#### (1) コミュニストとしてのソーサ

ソーサは1950年代にアルゼンチン共産党に入党したが、1990年代に離党している。共産党員であることと、共産主義者であることについて語ったインタビューから。

彼女の Kommunismus の種は「ずっと古びないひとつの問い」から生れているという。「なぜ、生まれた時からなにひとつ持たず、貧困と空腹にさらされる人と、生まれた時からすべてに恵まれ、なお知的に成長する可能性ももてる人がいるのか」（Braceli 2010: 209）という問いだ。

共産党とのかかわりについては、以下のように語っている。

一度も党の集まりに出席したことはありません——私は昔も今も歌手以外の何者でもありません。私の使命はもっともよい音楽と詩を選び、上質な歌を歌うことです。私はいつもとても自由で、誰にも相談せずに自分の思い通りに発言してきました（略）（同：200）。

アルゼンチン共産党とのここ数年間のいざこざに対する怒りをしずめるのには苦勞しました。私はある人を共産党が除名し、狂人の汚名を着せたことを覚えています。その男性の身に起こったことが私は気に入りませんでした。その事実が私に観察の機会をくれたので、党員証に別れを告げたのです。それ以前にはロシアで起きたことを私は観察しました。あそこでは官僚主義が人々の日常生活をないがしろにしていました（同：202）。

武力革命についても、批判的な発言を行っている。

私は何度も左翼の人たちに「革命的ではない」とひどく非難されました。それを私に言ったのは、たとえばモントネロスです。（中略）もし革命的であるということが、人々をあのように殺すことならば、私は違います、革命的ではありません。（中略）私は信じています——革命は少数者の武器によってではなく、多くの人たちの合意のもとに実現されると。（略）私は70年代に何千人という若者たちがとった武装路線に同調はしませんが、彼らの勇気と、彼らの追求した理想や夢見ていたものを、ここから尊敬しています。彼らは間違いを犯したでしょうが、自分たちの命で贖いました。彼らは官僚ではなく、犯罪者でもなく、間違った道をえらんだ気短な理想主義者たちでした（同：200）。

彼女の暴力観は次の発言にみられるように独特なものだ。

私は暴力に反対です、だから失業にも反対。なぜって、失業は家族を崩壊させるから、その点で暴力なのです、ちがうかしら？（同：208）

こうした発言から、彼女の「コミュニズム」思想がどのようなものか理解できよう。それは、資本主義社会のなかで、持たざる者がさらされるさまざまな形の暴力に反対すると

いうとてもシンプルなものだ。そして彼女自身の抵抗の方法は、よい歌を選び、歌うことだった。

## (2) ペロニズムか、エビータ主義か

I 章でみたように、ソーサは短期間だが、ペロニスタだった時代がある。しかし、ペロニズムに対する不信感は彼女のなかで消えず、結局は共産党に入党したのだった。ペロニスタへの不信感とは反対に、ソーサはペロンの妻エバ（愛称はエビータ）には崇拜の感情を抱きつづけた。

エバのファンを、ソーサはエビティスタと呼び、自らも 12 歳のときからエビータを熱愛していたと語る。「感情面で、ペロンと労働者との間に連帯感を育む上で重要な役割を果たした」（杉山 2007：35）したとされるエバだが、ソーサのエバへの愛は、そのままペロンへの愛とつながりはしない。エバについては「エビータの敵ですら、彼女は美しいばかりでなく賢いひとだけれど、パートナー選びにおいてはしくじったと理解していました」（Braceli 2010: 229）と語るほどだ。

エバは、貧しく差別される境遇から大統領夫人となった、シンデレラ物語の主人公のようでもあり、彼女をあがめる人びとにとっては「生きた聖母」（Hall 2004: 215）だった<sup>1)</sup>。そればかりではなく、エバの時代には、女性参政権が実現し多くの女性たちがペロニスト女性党（Partido Peronista Femenino）などを通じて自分たちの権利に目覚めていった時代でもあった。それまで「フェミニズムなど知りもしなかった多くの女性たちが、エビータのおかげで政治に参加することになった」（フレイザーとナヴァーロ 1997：132）のである。貧しい子どもたちのための「子どもの街 Ciudad Infantil」や、病院、老人ホーム、職探しをする若い女性たちのための宿泊施設を建設し、エバ・ペロン財団を設立して自ら来訪する人びとに面接して現金を与えたり、物資を配ったりした<sup>2)</sup>（ドゥジョブヌ・オルティス 2001：314-338）。また、非嫡出子と嫡出子の権利の平等化もこの時期に実現された（Adamovzsky 2010: 221）。

彼女の行動に対する批判は根強くあるが、貧しく、疎外された人びとに対する細やかな配慮は、自らの経験に裏打ちされていたのだろう。彼女は、ソーサの両親のような貧しい労働者たちに対して「私の愛するデスカミサドス、グラシータス」<sup>3)</sup>（Adamovsky 2012: 188）と呼びかけた。彼女は 33 歳の若さで病死したが、1960 年代、エバは「正義と平等を求めるシンボル」としてよみがえった。モントネロスの若者たちは、「エビータが生きていたら、モントネラ [モントネロス montoneros の女性単数形] だっただろう」（サン

チェス 1997：185) というスローガンを叫び、金色に染めた髪を肩におろし飾り気のないシャツ姿ではほえむエバの写真(同：182)をシンボルとしてかかげたのだった。

- 1) エビータがバルコニーから語りかける姿はあたかもマリアが信者たちに奇跡的に話しかけているような感覚をよびました、とある。
- 2) エバ・ペロンの行った事業について。[http://www.evita-peron.org/evita\\_peron\\_legacy-es.htm](http://www.evita-peron.org/evita_peron_legacy-es.htm) エバ・ペロン歴史研究財団のHP(2017年9月15日参照)
- 3) デスカミサドス(descamisados)、グラシタス(grasitas)はいずれも貧しくみなの質素な(あるいは衛生状態の悪い)人びとをさげすんで使われていたが、これらをペロン夫妻は愛称として使用した。

### Ⅲ. 亡命——自分の土地のためのセレナーデ

#### 1. 亡命にいたるクロノロジー

##### 1975年

時期は不明 トックマンでのリサイタルが中止となる(Matus 2016: 199)。

エストレジャ劇場での数週間にわたる公演の前に脅迫状が届く。4日間のうちに国を出ろという内容でAAA<sup>1)</sup>のサインがあった(Braceli 2010: 154)。

連邦警察に告発。劇場の支配人クロニカ紙に事件を公開する。記者会見で、「出て行きません。私の国に残る」と宣言。

エストレジャ劇場でリハーサルをしていると海兵隊がやってきて護衛につく。彼らは家までやってきてペロン夫人(当時の大統領イサベル・ペロンのこと)の名前を出す(同：155)。

匿名の電話がエストレジャ劇場にかかりつづける。

公演まで一週間という時、朝、町中にコンサートへ行くなという呼びかけのポスターが貼られる(同：155)。だが、公演のチケットは完売。ボランティアの護衛が多数来場し(モントネロス, FAR<sup>2)</sup>, ERP [Ⅱ章2を参照], 共産党に近い警備員など(同：156))一か月の公演は無事に終了した。

12月30日劇場券売所の裏のトイレで爆発があり、スタッフが一名死亡。77年にはホールで火事が起こる(ディレクター, ビアサッティの証言, 同：155)。

##### 1976年

年初からボリビア、メキシコ、フランス、アルジェリア、ドイツ、ブラジルへ公演旅行。

8月、ビクトル・ハラなどの曲を含むアルバム“Mercedes Sosa”を編集。

## 1977 年

アルバム「ユパンキを歌う Mercedes Sosa interpreta a Atahualpa Yupanqui」を録音。日本、スペイン、フランス、イタリア、ブラジル、メキシコ、ベネズエラへ公演旅行。軍事政権によるいやがらせは続く。検閲がきびしくなる。

## 1978 年

ベネズエラ、メキシコ、コスタリカ、パナマ、プエルトリコに公演旅行（同、299）。この年のある日（日付は不明）、共産党の指導者フェルナンド・ナドラ（Fernando Nadra）が来訪し、警告する。ナドラ自身は AAA と ERP から死刑宣告を受けていた。

「メルセデス、私たちは君は国を出なくてはいけないと考えている。状況がとてもむづかしいことになっているんだ。日々私たちへの包囲網が狭まっていて、君のことをこれまでのように守ってあげることができない」（Matus 2016：200）。

10 月 20 日 ラプラタの劇場でのリサイタル中に観客と共に拘留される（Matus, Adellach）。

ラプラタで逮捕された晩のイメージが戻ってきました。警察は準備万端に手続きを終え、軍隊が一带を取り囲んでいました。彼らは私が「土地が持てたら」を歌ったら突入しなければならなかったのです。私が勇気をだしてそれを歌い、「ファニート・ラグナの約束された世界」を歌うところで、ファビアンが取り乱した様子で現れ、私に向かって叫びました「メルセデス、舞台から降りて！」（Braceli 2010: 163）

その場にいた観客（大学生が多かった）300 人超とともにソーサ、息子のマトゥス（上記証言中のファビアン）、ギタリストが 18 時間拘留される。写真や指紋を取られたあと、翌朝解放された（1981 年のインタビュー。Adellach 1981: 170）。

11 月 4 日（中南米音楽 1979.2）ラサール劇場でのリサイタルでは、脅迫のためか空席がみられたが、聴衆からは暖かい拍手が送られた（同：170-171）。だが、舞台の上にいるときに電源を切られ、隣のクリニックの発電機から電気をもらうなどの妨害があった（Braceli 2010: 159）。

数週間後 [1978 年 12 月か?], ブエノスアイレスのプレミア（Premier）劇場での公演の

おり、開演直前に劇場に警察が現れる。爆弾をしかけたという電話がかかってきたので捜査するといわれ、公演は中止になった。新聞に広告も拒否され、ラジオでソーサの曲がかけられなかったにもかかわらず、事前にチケットは売りきれていた (Adellach 1981: 171)。

## 1979 年

1 月 5 日、ピナマル (Pinamar) の劇場でのリサイタルでは、開演一時間前に [警察が?] やってきて、中止になる (Braceli 2010: 159)。

2 月 2 日スペインに向けて出国。事実上の亡命<sup>3)</sup> マドリードからパリへ。これ以後、アルゼンチン国内での公演は 1982 年 2 月まで行われなかった。

## 2. 自分の土地のためのセレナーデ

1979 年発売のこのアルバムのタイトル「自分の土地のためのセレナーデ *Serenata para la tierra de uno*」は、アルゼンチン生まれの詩人マリア・エレン・ウォルシュ (María Elena Walsh) の詩集「*Juguemos en el mundo*」(1970) にある同タイトルの詩 (作曲もウォルシュ自身) に由来している。

タイトルの “la tierra de uno” の定冠詞 “la” につづく “tierra” は土地をあらわし、帰属を意味する前置詞 de のあとには「数詞の 1 としても用いられる一般的な人、一人の人」を表す名詞 uno がつく。自分の土地とは生まれた場所、あるいは育った場所のその両方を通常は意味するわけだが、「故郷」を表す語はほかにもあり (pago など)、あえてニュートラルな表現にこだわっている。

音楽的にも特定の地域の民俗音楽形式にはこだわっていないが、全体的にノスタルジアを感じさせる曲調で、“Porque me duele si me quedo, pero me muero si me voy. Por todo y a pesar de todo, mi amor, yo quiero vivir en voz.” (ここにのこれば私は苦しむ、けれどここを離れれば死んでしまう。すべてのために、そしてまたそれゆえに、愛する者よ、私はおまえのなかで生きたい) という最初の 2 フレーズは、自分が属する土地への複雑な思いを感じさせる。その心情は、まずは作者ウォルシュのものであっただろうし、その後亡命を余儀なくされるソーサの心情でもあり、同じ思いを故郷に抱く人びとに共有されうるものだろう。

ウォルシュの曲は、ほかに「貧しき忍耐 (または機織る女性たち)」がアルゼンチン盤に収録されており、ブラジル、スペインの盤には「蟬のように」が収録されている。ウォルシュは一時期パリでアルゼンチンの民俗音楽を演唱する活動をしていたが、1956 年に帰国後は、民俗音楽から離れ、子ども番組や映画の脚本を書いたり、juglaresa (中世の吟



遊詩人を指す語、女性形）として自分の作った詩に曲をつけてソロで歌う活動をしていた（詳しくは伊香 2007）。1979 年 8 月 16 日にはクラリン（Clarín）紙のコラムで軍政をあからさまに批判する記事を執筆し、24 時間後には彼女の歌はすべて放送禁止となった（Pujol 1993: 181）。

ソーサの「セレナーデ」は、アルゼンチン盤のほか、ブラジル、コロンビア、ペルー、スペイン、ベネズエラなどで Philips から LP が発売されている。ベネズエラ、ペルーの盤は、アルゼンチン盤をベースにしていると考えられるが、コロンビア、スペインで発売されたものはブラジル盤がベースになっているようである。なかでもスペイン盤とブラジル盤は曲順・曲目とも同じになっている。

アルゼンチン盤の曲目は、1. 貧しき忍耐（または機織る女性たち）[詞：マリア・エレナ・ウォルシュ、曲：オスカル・アレム]、2. 綿摘みの男 [ラモン・アジャラ]、3. 天使が死ぬと [詞エウヘニオ・カルロス・インチャウスティ、曲マルセロ・フェレイラ]、4. 古きカア・カティ [詞：エドガル・ロメロ・マシエル、曲：アルベリコ・マンシジャ]、5. 自分の土地のためのセレナーデ [マリア・エレナ・ウォルシュ]、6. いつも私はサンフアンに帰る [詞：アルマンド・テハーダ・ゴメス、曲：アリエル・ラミレス]、7. 昼寝している小さなフアン [チャチョ・ムジェル]、8. 悲しき村々 [オティリオ・ガリンデス]、9. キ・ショロロ [アニバル・サンバジョ]、10. フワニト・ラグナの約束された世界 [詞：テハーダ・ゴメス、曲：セサル・イセーラ]。

ブラジル／スペイン盤 [以下、伯西盤とする] の曲目は、1. 貧しき忍耐（同上）、2. 綿摘みの男（同上）、3. 蟬のように [マリア・エレナ・ウォルシュ]、4. 天使が死ぬと（同上）、5. 古きカア・カティ（同上）、6. 自分の土地のためのセレナーデ（同上）、7.

自由な鳥のように [詞・曲 アデラ・グレイヘル, ディアナ・ロチェス], 8. 大地の熱 [詞: シコ・ブアルケ 曲: ミルトン・ナシメント], 9 単純なことどもの歌 [詞: テハーダ・ゴメス, 曲: セサル・イセーラ], 10. 悲しき村々 (同上), 11. キ・ショロロ, 12. フワニト・ラグナの約束された世界 (同上)。

こうして並べてみると、アルゼンチン盤の 6 曲目, 7 曲目が伯西盤ではカットされ、逆にアルゼンチン盤になかった曲が伯西盤にプラスされていることがわかる。3 の「蟬のように」、7 の「自由な鳥のように」、8 の「大地の熱」、そして 9 の「単純なことどもの歌」である。この 4 曲は、2011 年に発売された「それでも私は歌いつづけた——検閲された歌と未収録曲集 (Y Seguí Cantando: Canciones Censuradas E Ineditas, Universal Import)」に収録されており、その解説によれば、LP の編集時に検閲を受けカットされたものだとある<sup>4)</sup>。

### 3. 削除された 4 曲について

#### a) 蟬のように

何度も私は殺されて  
何度も私は死んだ  
それでも私はここにいる  
息ふきかえして。  
災難よありがとう  
短剣を持つ手にもありがとう  
殺し方がわかったから  
私は今も歌いつづけている。  
(リフレイン)  
太陽にむかって蟬のように歌い続ける  
土の下で一年をすごしたあと  
闘いから生きて帰った兵士のように

8 行の詩のあとに 3 行のリフレインがつづき、それが三回繰り返される。

Tantas veces me borraron 何度も私は消され  
tantas veces desaparecí, 何度も私は失踪した  
a mi propio entierro fui 自分の埋葬に行った

sola y llorando. ひとりぼっちで泣きながら

上記は二番の歌詞の冒頭だが、二行目に“desaparecer”という動詞が使用されていることに注目していただきたい。このあと「ハンカチに結び目をつくり／だが、あとで忘れてしまった／一度かぎりのことではなかったから／そして私は歌いつづけた」とつづく。三番は一人称から二人称へ切り替わる。

「何度も君は殺されて／何度も君はよみがえるだろう／たくさんの夜を／絶望してすごすだろう／難破した時／暗闇の中で／誰かが君を救うだろう／歌い続けるために」

作者のウォルシュはこの歌を歌った当時を振り返って、「75年、私たちが死者や暗殺や死体でいっぱいだったとき、私は聴衆の前で「蟬のように」を歌ったけれど、だれもそんなことに関心を示さなかったし、だれも理解しなかった。あとになってこの歌は讃歌にかわり、聴衆はそれが自分たちにかかわりのあることを言っているのだと気づいた」(Luraschi y Sibbald 1993: 135) と語る。

#### b) 大地の熱

小麦を脱穀する  
ひとつぶひとつぶあつめ  
奇跡のパンを作り出し  
そのパンでおのれをみたせ

サトウキビを切り  
その煮汁をあつめる  
サトウキビの蜜を盗む  
その蜜にまみれる

大地をだきしめる  
大地の望みをする  
熱くなった大地は 季節になれば  
実りをもたらす

軍政時代のブラジルで「検閲官たちの格好の攻撃対象とされた」（マッガワン&ペサーニャ 2000：128）シコ・ブアルケの詩にミルトン・ナシメントが曲をつけたもので、ソーサはポルトガル語でこの歌を歌っている。

c) 単純なことどもの歌<sup>5)</sup>

人は小さなことどもと無造作にわかれをつげる  
秋になると葉をおとししてしまう木と同じに  
結局のところ悲しみというのは単純なことどものゆっくりした死なのだ  
そんな単純なことどもは心に残って痛みつづける

人はいつも人生を愛した懐かしい場所にかえる  
そのときわかるのだ——いとしなことどもがもうそこにはないことが  
だから若者よ、帰ることを夢見ずにここを発ちなさい  
なぜなら愛は単純なことで、時は単純なことどもを食い尽くすのだから（一部略）

他にもヒット曲<sup>6)</sup>を生み出した、テハーダ・ゴメス（詩）、セサル・イセーラ（曲）のコンビによる作品。亡命4か月前の78年11月のラサール劇場でのリサイタルでは、アンコールを受け、計二回歌うことになったという（『中南米音楽』1979年2月号, 80ページ）。

d) 自由な鳥のように

（リフレイン）  
自由に飛んでいく鳥のように  
自由な鳥のような、そんなおまえを愛している

9か月の間お前は私の内側で育ち  
今もお前は育ちつづけ、発見しつづけている  
発見し、一人の人間となるやり方を学んでいる  
人生にはお前を驚かせるものばかり

ウルグアイ出身の Diana Roches (Diane Denoir)<sup>7)</sup> と Adela Greijer の共作。ロチェスはウルグアイからアルゼンチンへ避難してきたが、75年にベネズエラに逃れている。

叫ぶように歌われる最初の、そして、のちに繰り返される二行のフレーズが印象的だが、その後語りかけるように三回繰り返される4行の詩は、自分の生んだ子どもへの愛情を感じさせる1番につづき、「お前のいないときは、どんなにその帰りを待っているか」「新聞をひらくたびにお前の名前を探す」と母親の不安を語り（2番）、だからといって「人生のあとを乞食のように追ってはならない」「世界はお前のなかにあるのだから、それを変えなくては」（3番の詩より）と続いていく。

同時期の児童文学への検閲について分析した拙稿では、私有財産や資本主義的価値観への疑問を子どもたちに持たせる（と検閲官が判断した）内容の作品に対して、書店での販売や教育現場での使用が禁じられるという事例があった（伊香 2007）が、上記の4作品に関するかぎりとくにそのような印象を与えるものはない。しかし、軍部の行っていた強制失踪という手法の核心にふれる（desaparecerの過去分詞はdesaparecidoとなり、強制失踪の犠牲者をさす名詞として使われる）歌詞をもつa）、そのような状況下でどこにいるかわからないわが子への思いを歌うd）、政治的な意味合いは感じられないが、性的なものを感じさせるb）（原タイトルの“cio”はポルトガル語で「発情期、交尾期」を意味する）、などは検閲の事由がある程度推測できる。c）に関しては何が問題とされているのか、詩の内容からうかがいしることはむづかしいが、軍事政権が「若者」を意図的に広告から抹消したというケースも報告されており（同前），“muchacho”（若者）に呼びかける歌であるところに問題があったのかもしれない（この点に関しては、まだ若いと思われる「わが子」に呼びかけるd）も同様である）。これ以上のことは現段階では不明だが、c）は当時の聴衆から熱狂的に支持されていたという点から、場を共有した人びとにしか理解できないなんらかの含意があったのかもしれない。

なお、これらのカットされた歌がアルゼンチン国民にきかれる可能性がなかったかどうかについては、軍政時代に国境を越えてブラジルに旅行したアルゼンチン人たち（1981年の1～3月では50万人）が（禁じられた）映画を観賞したり書籍を購入していた（Adellach 1981: 142）という記述もあり、LPについても同様のことが起こっていたと仮定するなら、ブラジル盤がアルゼンチンに個人的に持ち込まれていたとしてもおかしくはない。

- 1) AAA Alianza Anticomunista Argentina アルゼンチン反共産同盟
- 2) FAR Fuerzas Armadas Revolucionarias 革命軍（定訳はないようである）
- 3) 当時のことをメルセデス・ソーサ公式サイトのパイオグラフィーはこうに書いている——「理

論的には、メルセデス・ソーサは国を出入りすることができたし、どんな法的な訴えも起こされてはいなかった、しかし歌うことはできなかった」<http://mercedessosa.org/biografia> (2017年9月19日参照)。

4) 2011 Universal Music Argentina Diego Fischermanによる解説。

5) 歌詞は<http://www.cancioneros.com/nc/4175/0/cancion-de-las-simples-cosas-armando-tejada-gomez-cesar-isella>による (2017年9月15日参照)。

6) のちに南米諸国連合 UNASUR の讃歌となった Canción con todos (1969) など。

7) Roches (Rechtes としばしば表記される) については <https://www.pagina12.com.ar/diario/suplementos/radar/9-2378-2005-07-20.html> (2017年9月15日参照)

## 結論

本稿では、メルセデス・ソーサが1979年に亡命するまでの軌跡について概観し、1979年のアルバム「自分の土地のためのセレナーデ」から検閲により削除された歌について内容を提示した。ソーサの生まれた1935年から79年までのアルゼンチン社会にはそれまでになかった変化——具体的にはペロニズムという大衆運動——があり、それが1960年代の若者の運動と交差して先鋭化し、反作用として、軍などによるソーサの作品や活動への妨害・検閲がもたらされた。

こうした検閲の根拠としては、「憲法によってさだめられた秩序を混乱させるような活動すべてを禁じ処罰する」という法律 208405 号が1974年の時点で発布され、実刑を命じることでもできると定められていた(伊香 2007) が、ソーサに対しては法的な措置はなにもとられていない。2013年に発見されたブラックリスト<sup>1)</sup>のなかで、もっとも危険なフェーズ4の人物として名前があがっているのだが、現実には1979年の亡命(出国)後も入国禁止の手続きがとられたことさえなかったのである。

したがって、Ⅲで見たように、検閲はソーサ自身への脅迫という形であらわれ、ラジオでの放送の自主規制、レコードが店頭から消える、公演会場の点検などの形で間接的に行われていった。この点で、1978年のラプラタでのコンサートでの軍人の発言は示唆にとむ。コンサート会場にやってきた警官たちにソーサが理由を教えてほしいとたずねると、警官はプロテストソングやマルクス主義の歌が原因だと答えた。それに対して「それならどうして私に歌わせるんです？ 私に歌わせることを禁止した方が簡単でしょう？ それで十分なのでは」と言った彼女に対し「いいか、ここではやっていいことかどうか決めるのは私たちなんだ」(Adellach 1981: 169) と答えたのだという。

以上みてきたように、ポピュラー音楽への検閲は、禁止の根拠はあいまいで恣意的なも

のであり、表現者の身体への危害をほのめかし、恐怖により人びとをコントロールするという強制失踪の方法論に近いものであった。

- 1) <http://www.infonews.com/nota/107235/las-listas-negras-que-llevaron-al-exilio>

#### 引用文献リスト

- 伊香祝子「バルトーロの不思議な木」『リブレーザ4号』東京：リブレーザ社，2007
- 「野の歌，野の花 カーハのうたからきこえてくるもの」『リブレーザ7号』東京：リブレーザ社，2008
- 石田智恵「軍政下アルゼンチンの移民コミュニティと「日系失踪者」の政治参加」『コンタクト・ゾーン7号』56-82頁，京都人類学研究会，2015
- 宇佐見耕一「世界恐慌前後のアルゼンチン工業連盟の工業化キャンペーン」星野妙子編『ラテンアメリカの企業と産業発展』研究双書 No.468，85-128頁，東京：アジア経済研究所，1996年11月
- 「19世紀末アルゼンチン・トックマン糖業と地方オリガルキー」『ラテンアメリカ研究年報 No.18』東京：ラテンアメリカ学会，1998年6月
- 小倉英敬『ラテンアメリカ1968年論』東京：新泉社，2015
- 杉山知子『国家テロリズムと市民』東京：北樹出版，2007
- ドゥジョブヌ・オルティス，アリシア『エビータの真実』竹澤哲訳，東京：中央公論新社，2001（原著1995）
- 高場将美「フォルクローレ・アーティスト研究 第3回アリエル・ラミレス」『中南米音楽』東京：中南米音楽，1979年9月，69-75頁
- 『中南米音楽』東京：中南米音楽，1975年8月，1979年2月，1982年5，9月号
- 濱田滋郎「勝利のときまで（フィリップス，FDX297）」日本版解説，1974？
- 林みどり「管理社会と親密圏：「五月広場の母たち」における政治的ポテンシャルティ」『立教大学ジェンダーフォーラム年報11』85-96頁，2009
- 廣瀬純「アルゼンチンの《一九六八年》，あるいは，もうひとつの《暴力》」桂秀実編『思想読本 [11] 1968』197-205頁，東京：作品社，2005
- 比嘉マルセロ「鉛色の時代独裁政権下（一九七六～八三）のアルゼンチン・ロック」石橋純編『中南米の音楽』229-255頁，東京：東京堂出版，2010
- フレイザー，ニコラス&ナヴァーロ，マリサ『聖女伝説エビータ』阿尾正子訳，東京：原書房，1997（原著1980）
- マッガワン&ペサーニャ『ブラジリアン・サウンド サンバ，ボサノヴァ，MPB—ブラジル音楽のすべて』武者小路実昭，雨海弘美訳，東京：シンコー・ミュージック，2000（原著1998）
- 松下洋『ペロニズム・権威主義と従属—ラテンアメリカの政治外交研究』東京：有信堂高文社，1987
- 「21世紀アルゼンチン・ペロニスタ外交に見る1970年代ゲリラ思想の影」『河合文化教育研究所研究論集』12集，2015
- 松下冽『現代ラテンアメリカの政治と社会』東京：日本経済評論社，1993
- マティルデ・サンチェス『エビータ：写真が語るその生涯』青木日出夫訳，東京：あすなろ書房，1997（原著1996）
- Adamovsky, Ezequiel. *Historia de las clases populares en la Argentina*. Buenos Aires, 2009

- Adellach, Alberto. *Argentina: cómo matar la cultura, testimonios: 1976–1981*. Spain: Editorial Revolución, AIDA, 1981
- Braceli, Rodolfo. *Mercedes Sosa: la negra*. Buenos Aires: Sudamericana, 2010
- Hall, Linda B. *Mary, Mother and Warrior*. Austin: Univ. of Texas Press, 2004
- Invernizzi, Hernán. Gosiol, Judith. *Un golpe a los libros: Represión a la cultura durante la última dictadura militar*. Buenos Aires: Editorial Universitaria de Buenos Aires, 2002
- Luraschi, Ilse Adriana, and Sibbald, Kay. *María Elena Walsh o el desafío de la limitación*. Buenos Aires: Editorial Sudamericana, 1993
- Matus, Fabián. *Mercedes Sosa: La mami*. Buenos Aires: Planeta 2016
- Pujol, Sergio. *Como la cigarra: María Elena Walsh Una biografía*. Buenos Aires: Beas Ediciones, 1993
- Walsh, María Elena. *Juguemos en el mundo*. Buenos Aires: Editorial Sudamericana, 1992
- . *Cancionero contra el mal de ojo*. Buenos Aires: Editorial Sudamericana, 1993